

マタイによる福音書5章27-32節 「姦淫の心」

1A 心の中の姦淫 27-30

1B 「姦淫」 27

1C 死罪

2C 神の憐れみ

2B 情欲 28

1C 貪り

2C 律法の目的

3B 目や手の除去 29

1C 罪の所在

2C 聖さの重要性

3C 躓きの除去

2A 離婚 31-32

1B 離縁状 31

2B 姦淫の罪 32

本文

私たちの山上の説教シリーズは、マタイ 5 章 27-32 節に入ります。「27 『姦淫してはならない』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。28 しかし、わたしはあなたがたに言います。情欲を抱いて女を見る者はだれでも、心の中ですでに姦淫を犯したのです。29 もし右の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出して捨てなさい。からだの一部を失っても、全身がゲヘナに投げ込まれないほうがよいのです。30 もし右の手があなたをつまづかせるなら、切って捨てなさい。からだの一部を失っても、全身がゲヘナに落ちないほうがよいのです。31 また『妻を離縁する者は離縁状を与えよ』と言われていました。32 しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも、淫らな行い以外の理由で自分の妻を離縁する者は、妻に姦淫を犯させることとなります。また、離縁された女と結婚すれば、姦淫を犯すことになるのです。」

イエス様が、「5:20 あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入れません。」と言われて、その義について語っておられる箇所です。初めに、「殺してはならない」と彼らが教えていることに対して、イエス様が、「5:21 兄弟に対して怒る者は、だれでもさばきを受けなければなりません。」と言われて、「殺す」ことに至る心の姿勢まで、その戒めには含まれることをイエス様が教えられました。パリサイ人や律法学者は、事実、殺人の罪を犯していなければ、この戒めを守っているように教えていました。ですから、自分で神の義に到達できるし、到達するために律法を守るのに熱心になっていました。ところが、イエス様が

律法の真実な意味を解き明かされますと、自分が何度となく神の戒めを破っており、神の裁きを受けなければいけないか知れない、と悟ります。ゆえに、神の憐れみが必要で、神はその処罰をご自分の御子キリストにおいて行われることによって、私たちの罪を赦すことにされたのです。

人というのは、大体、律法学者やパリサイ人のように義というものについて考えていますね。表向き、特段に悪いことを行っていません。だから、天国に行けると思っています。しかし、イエス様のこの教えを聞くことによって、一気に神の聖さと正しさが見えて来て、それで自分の罪深さが分かって来ます。自分は神によって裁かれて、地獄に投げ込まれるような人間だということが分かるのです。それで初めて、イエス様の十字架の意味が分かります。

今、私たちが読みました、「姦淫してはならない」についての教えも、イエス様が解き明かされることによって、いかに自分が救われなければいけない存在なのかを否応なしに教えられます。

1A 心の中の姦淫 27-30

1B 「姦淫」 27

1C 死罪

27 『姦淫してはならない』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。

「姦淫」という意味、その定義は、「結婚している者が、自分の配偶者以外の者と性的関係を持つこと」であります。私たちの社会では、不倫という言葉が使われて、それは倫理的に、道徳的に悪いものだと思われていますが、律法のような厳しさはありません。と言いますのは、姦淫の罪を犯したら、死刑だからです。「申 22:22 夫のある女と寝ている男が見つかった場合は、その女と寝ていた男もその女も、二人とも死ななければならない。こうして、あなたはイスラエルの中からその悪い者を除き去りなさい。」律法の中には、罪を犯したらいけにえを持ってきなさい、という教えもあるのですが、姦淫の罪はこれだけ厳しく、いけにえによって償うようなものではないことがわかります。殺してはならない、と同じぐらいの厳しさを、神は姦淫に対して持っておられます。

それは、神ご自身がご自分の形に男を造られ、男から女を造られ、そして男が女と結ばれ、一体となるという制度を造られていたからです。そして、そこから「生めよ。増えよ。」と神は命じられたのであり、人々が生きていくための最も基本の単位であり、これが壊れたら社会全体が壊れてしまいます。それで神はこのことについては、非常に厳しく対処されます。

2C 神の憐れみ

ダビデが、殺してはならないという戒めと、姦淫してはならないという戒めのどちらをも破った時のことを思い出してください。彼は、自分は罪を犯したことを告白して、預言者ナタンは、主も罪を見過ぐすと言いました。ダビデは、自分の行いに従えば、死をもって報いなければいけませんでし

た。詩篇 51 篇で、興味深いことを彼は話しています。「詩 51:16-17 まことに私が供えてもあなたはいけにえを喜ばれず全焼のささげ物を望まれません。神へのいけにえは砕かれた霊。打たれ砕かれた心。神よあなたはそれを蔑まれません。」自分のいけにえでは償えない、自分自身が砕かれることによるのみ、神は憐れみによるのみ、私を受け入れてくださると歌っています。

他に、ヨハネ 8 章の有名な、姦淫の現場で捕えられた女の話の思い出します。律法学者とパリサイ人は、彼女を連れて来て、石打ちにするようにモーセの律法の中で命じられていると訴えました。イエス様は、「罪のない者が、まずこの人に石を投げなさい。」と言われたら、だれもが罪があることを知っていて、それで引き下がりました。イエス様は、「ヨハ 8:11 わたしもあなたにさばきを下さない。」と言われて、憐れみを示されたのです。「自分は死ぬべき罪人だ。しかし、神は生かしてくださった。だから、残る生涯を、私は神にお献げします。」として生きるのです。

2B 情欲 28

1C 貪り

28 しかし、わたしはあなたがたに言います。情欲を抱いて女を見る者はだれでも、心の中ですでに姦淫を犯したのです。

殺してはいけないの戒めと同じように、姦淫をしてはいけない、ということは、その心の中から始まることです。律法学者とパリサイ人は、実際に姦淫の行為を戒めるものと教えていましたが、その十戒の中にさえ、心の中の姦淫が実際の姦淫に至ることを示唆しているのです。「出エ 20:17 あなたの隣人の家を欲してはならない。あなたの隣人の妻、男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべての隣人のものを欲してはならない。」欲すること、貪ることへの戒めが最後にありますが、そこに、隣人の妻を欲してはならないと書いてあるのです。欲するという心の中で起こっていることから、実際の姦淫の行為に至るのに、その心の動きについては一切取り扱わなかったのが、彼らです。

2C 律法の目的

どうしてでしょうか？とても簡単です。「もし、心の動きまでのことであれば、守ることができない。」ことはあまりにも明らかだからです。先ほど言及したヨハネ 8 章では、イエス様が、「罪のない者が、まずこの人に石を投げなさい。」と言われた時、年長の者から一人一人引き下がったことが書かれています。自分たちは姦淫の罪を犯していた女を引きずり出してきたのですが、自分自身が心の中で女を欲したことがなかったのか？ということをお問われたら、石を投げられなければいけないけれども、自分は投げることはできないと分かるでしょう。

パウロのこのことに気づきました。「ロマ 7:7-8 むしろ、律法によらなければ、私は罪を知ることはなかったでしょう。実際、律法が「隣人のものを欲してはならない」と言わなければ、私は欲望を知らなかったでしょう。しかし、罪は戒めによって機会をとらえ、私のうちにあらゆる欲望を引き起こし

ました。律法がなければ、罪は死んだものです。」パウロは、欲しがってはならないという命令を聞いた時にいかに自分が、欲しがっているかを知りました。だからと言って、それで自分を直せるわけでもなく、ただ、欲しがっているということだけが分かっただけで、どうすることもできなかったのです。それで、罪を犯せば死ぬのだから律法の教えに対して、自分はただ死ぬしかないと思ったのです。これが律法のすることであり、律法は私たちが罪と死に定められていることを教えます。いかに墮落していて、自分では救いようのない存在であるかを教えます。

パウロは、このことを「キリストに導く養育係」と表現しました。「ガラ 3:23-24 信仰が現れる前、私たちは律法の下で監視され、来たるべき信仰が啓示されるまで閉じ込められていました。こうして、律法は私たちがキリストに導く養育係となりました。それは、私たちが信仰によって義と認められるためです。」律法がなければ、なぜキリストが十字架にまでかからなければいけなかったのかが、分かりません。それで、キリストを信じる信仰によって救われ、義と認められることを知るために、律法は養育係となっていたということです。養育係は当時は奴隷で、主人の子供を学校から家まで帰宅するのに付いて行ったと聞いていますが、キリストにある神の家まで連れて行く役割を担っています。

ところで、ここで大事なことは、反応することは罪ではないということです。「情欲を抱いて女を見る者」というところで、「見る」というのは現在進行形になっています。つまり、じっくりと見つめている、という意味合いです。美しい人を見て、美しいなあと思うこと自体は過ちではありません。どうしても反応してしまうことで苦しむクリスチャンが多いですが、それはある意味、健全ではありますが、行き過ぎると不健康です。そうではなく、自分の意志で情欲をもって女を見ると決めて見ていることを指しています。ルターが興味深いことを言いました。「あなたの頭上で鳥が飛ぶのを防ぐことはできない。けれども、自分の頭に鳥が巣を作るのは防ぐことができる。」反応してしてしまうことが、罪ではありません。その反応に意志を合わせて、弄ぶことが問題なのです。

3B 目や手の除去 29

29 もし右の目があなたをつまらずかせるなら、えぐり出して捨てなさい。からだの一部を失っても、全身がゲヘナに投げ込まれないほうがよいのです。30 もし右の手があなたをつまらずかせるなら、切って捨てなさい。からだの一部を失っても、全身がゲヘナに落ちないほうがよいのです。31 また『妻を離縁する者は離縁状を与えよ』と言われていました。

イエス様の過激に聞こえる言葉は、一つや二つではありません。かなりありますが、ここはその一つです。もしここを、文字通りに受けとめたら、イエス様がずっと教えようとしておられることから外れてしまい、本末転倒になります。右の目を抉り出したところで、左の目で見ることが出来ます。右の手を切って捨ててしまっても、左の手があります。オリゲネスという有名な初代教父、初代教会の指導者がいます。これは言い伝えとも言う人がいるのですが、彼は情欲の問題を解決するた

めに去勢したと言われています。けれども問題は、その後も情欲の問題は続いたのです。

1C 罪の所在

そうです、私たちを躓かせるのは、私たちの体の器官ではなく心なのです。「マルコ 7:21-23 内側から、すなわち人の心の中から、悪い考えが出て来ます。淫らな行い、盗み、殺人、姦淫、貪欲、悪業、欺き、好色、ねたみ、ののしり、高慢、愚かさで、これらの悪は、みな内側から出て来て、人を汚すのです。」とイエス様は言われます。では、なぜイエス様は、こんなことを言われたのでしょうか？これは、イエス様の真意が逆にあることを示しています。つまり、「**右の目があなたをつまづかせるなら**」というのは、罪を犯す人の言い分けなのです。自分の目が、自分をたぶらかしてしまったとか、心ではなく、自分の体が勝手にそのようなことをやったという言い訳に対してイエス様が語っておられます。イエス様が言われたかったことは、次です、「**全身がゲヘナに投げ込まれないほうがよいのです**」。右の目がなくなっても、自分はそこにいます。自分自身がそのことを行っているのであり、体の諸部分はいくまでも器にしか過ぎないのです。

あるいは、外部に責任を転嫁する人もいます。「ヤコ 1:13-15 だれでも誘惑されているとき、神に誘惑されていると言ってはいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれかを誘惑することはありません。人が誘惑にあうのは、それぞれ自分の欲に引かれ、誘われるからです。そして、欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。」神に誘惑されたと神にせいにすることもあるし、よくあるのは「悪魔がそうさせた」というものです。悪魔が誘いますが、しかし罪を犯すのは自分なのです。だからヤコブははっきりと、欲が孕んで罪を生んで、罪が熟して死を生むと言っています。自分の欲に引かれるのです。

2C 聖さの重要性

そしてイエス様がここで言われているのは、「罪をどれだけ忌み嫌い、憎んでいるのか」ということです。目が抉り出されたり、手を切り落として、捨てられるというようなことは、実に忌まわしいと思います。当時は、聖書にも、サムソンやゼデキヤが目を抉り出されたということが書かれていますし、その忌まわしさによって、こんなことをしたらどうなるかを思い知れ、というメッセージを送ります。十字架における処刑も、その意味を果たしていました。

ですので、イエス様がこの言葉を発せられた時に「すごい酷いことを言うな。」と思ったら、こう自問自答しないといけません。「自分が同じように、姦淫の罪、不倫をすることについて、忌まわしいもの、おぞましいこと、忌み嫌うべきことだとみなしているか？」ということなのです。そこに何か、スリリングなもの、好ましいもの、そういった思いを抱いているのなら、このイエス様の言葉をしっかりとかみしめないといけませんね。神の聖さにあずかるということは、自分の犯した罪をいかに悔いているのか、憎んでいるのかにかかってきます。

3C 躓きの除去

そして、ここでイエス様が強調されているのは、「永遠のいのち、救いが最重要だ」ということです。イエス様が、ゲヘナ、地獄の話をしておられるのはそのためです。ゲヘナという言葉が彼らが聞く時に、神殿のいけにえからの老廃物や死体を火で燃やしている、ヒノムの谷を思い出しました。人が裁かれたら、ヒノムの谷のような、いつまでも消えない火の中で苦しめられると理解しました。私たちは、永遠の命と永遠の救いが、肉体の一部が損なわれたとしても、より大切だということを知る必要があります。

しばしば、クリスチャンになった人で、自分が怪我をして病院で身動きが出来なくなった時に、初めて神に祈り叫んだというような証しがあります。あるいは会社が倒産して、それで我に返って、イエス様を求めたという人もいます。その時には、体が言うことを聞かなくなっているかもしれません。文無しになっているかもしれません。けれども、五体満足で、あるいは金が潤沢にあって、それで地獄に行くのと、不自由になってから真実な自由を見出すのとどちらがよいのか？ということなのです。

では、私たちはどのようにして、キリストにあって躓きを除去できるのでしょうか？文字通り、目を抉り出すのでもなく、手を切り落とすのでもなければ、何によってこの肉の欲を抑えることができるのでしょうか？パウロはこう言っています。「ロマ 8:13 もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬこととなります。しかし、もし御霊によってからだの行いを殺すなら、あなたがたは生きます。」御霊によって、からだの行いを殺すとあります。からだの行いによってではなく、神の御霊によってなのです。

御霊は、私たちに神の愛を教えておられます。「ロマ 5:5,8 この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。・・・しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。」私たちは、神にどれほど愛されているか知るのには、聖霊によります。人の世界には、これほどの愛が存在しないからです。だれかのために死ぬこと、母親が息子のためにならすることができるかもしれません。しかし、息子を殺した殺人犯のために、身代わりになって死にますと言えますでしょうか？これが神のしてくださったことです。ご自分の子に「十字架につけろ」と言った者たちのために、御子を死に渡された方なのです。それは人では知ることはできません、神の聖霊が知らせてくださるのです。

この愛に触れた者は、心が変わられます。御霊がその心に注がれます。ゆえに、その心は石のようであっても肉のように柔らかくなります。心が一新されます。これまで、肉によって従うことのできなかった神の命令を、神の愛によって、心から従いたいと願うようになります。そこには、御霊が働き、導いてくださっているからです。この美しい関係を壊したくないと強く願うので、自分の欲情に対して、No!という勇気が与えられます。「I コリ 9:27 むしろ、私は自分のからだを打ちたた

いて服従させます。ほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者にならないようにするためです。」打ちたたくと、この決然と「欲情に従わない」と言わせる意志です。主に願い求めて、神に祈ります。聖なる御霊に導かれ、その思いに満たされます。

2A 離婚 31-32

最後の二節の部分ですが、これは大きな話題になります。離婚についてです。福音書では、マタイであれば 19 章 3 節以降で、詳しく出て来ます。ここでは、イエス様がお語りになった姦淫との部分との関係でお話したいと思います。

1B 離縁状 31

31 また『妻を離縁する者は離縁状を与えよ』と言われていました。

これは、再びユダヤ教の教師らが話していたことなのですが、申命記 24 章 1-4 節に出て来る内容です。「申 24:1-4 人が妻をめとり夫となった後で、もし、妻に何か恥ずべきことを見つけたために気に入らなくなり、離縁状を書いてその女の手に渡し、彼女を家から去らせ、そして彼女が家を出て行って、ほかの人の妻となり、さらに次の夫も彼女を嫌い、離縁状を書いて彼女の手に渡し、彼女を家から去らせた場合、あるいは、彼女を妻とした、あとの夫が死んだ場合には、彼女を去らせた初めの夫は、彼女が汚された後に再び彼女を自分の妻とすることはできない。それは、【主】の前に忌み嫌うべきことだからである。あなたの神、【主】が相続地としてあなたに与えようとしておられる地に、罪をもたらしてはならない。」

まず、ここでモーセは、「離婚状を与えよ」など命令していません。「離婚状を書いた場合は」ということで、かなり消極的です。イエス様はマタイ 19 章で、モーセがそういうことを言ったのは、あなたがたの心が頑なだからだ、と言われました。離婚状を渡さなければ、彼女は宙ぶらりんの状態になって、他の男に嫁ぐことができなくなるとか、他の男のところに行っても妾のままで妻になることができなるとか、女性の立場が危うくなります。それを戒めるためであり、また、再び女を自分のところに戻すというような、いい加減な理由で離縁することを強く戒める内容になっています。しかし、律法学者とパリサイ人は、それを本来の意味から外れて、離縁は当然ならがしてよいことだとしていたのです。理由は？自分が気に入った女といっしょになりたいからです。

2B 姦淫の罪 32

32 しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも、淫らな行い以外の理由で自分の妻を離縁する者は、妻に姦淫を犯させることとなります。また、離縁された女と結婚すれば、姦淫を犯すことになるのです。」

ここで、離婚についていろいろじっくり考えることができ、またクリスチャンにとっては大きな話題

になります。けれども、イエス様が姦淫の罪について語られている時にこの話をされている理由を考えるとどめたいと思います。なぜ離縁するのか？他の女と通じたいからです。自分の妻よりも魅力的な人が現れたら、妻をとっかえひっかえすることができるとうような考えが、彼らの中に少なからずあったのでしょう。特に、当時は見合い結婚です。幼い頃から双方の親が決めます。それで、自分に合っている人ではないとして離縁しなければ、やってられないという思いもありました。

しかし、イエス様はそこに釘を刺したのです。旧約聖書の最後の書、マラキ書に、祭司が何と、外国の娘をめとるために、今の妻と離縁している姿が出て来ます。神はこのことを暴虐であるとして嘆いておられる箇所があります。「マラ 2:14-16【新改訳改訂3】「なぜなのか」とあなたがたは言う。それは【主】が、あなたとあなたの若い時の妻との証人であり、あなたがその妻を裏切ったからだ。彼女はあなたの伴侶であり、あなたの契約の妻であるのに。神は人を一体に造られたのではないか。彼には、霊の残りがある。その一体の人は何を求めるのか。神の子孫ではないか。あなたがたは、あなたがたの霊に注意せよ。あなたの若い時の妻を裏切ってはならない。「わたしは、離婚を憎む」とイスラエルの神、【主】は仰せられる。「わたしは、暴力でその着物をおおう」と万軍の【主】は仰せられる。あなたがたは、あなたがたの霊に注意せよ。裏切ってはならない。」

このように、聖なる律法でさえ、自分の都合で自分の欲のために使ってしまうことさえできる、私たちは自分を欺くことができます。そういった欺きから自由にするのがイエス様です。イエス様は真理を語ってくださいます。そして真理は私たちを自由にします。